天井の高い部屋

左足を地面におろしたまではよかった。
しかし、その足に体重をかけて車の外に出ようとしたところで、腰に激痛が走った。
敏夫は顔をしかめた。背後から誰かに思い切り蹴りをいれられたような衝撃だった。
敏夫は四点杖をつき、そろりそろりと車を降りた。
「本当に大丈夫ですか」
自動ドアを閉める前に、運転手が声をかけてくれた。よければ玄関に着くまで介添えをしてやろうか、という親切心だった。
敏夫は礼をのべようと思ったが、腰のコルセットがじゃまで振りかえることができない。微笑みを返そうにも、首のコルセットがじゃまでそれもできない。せめて手を振って感謝を伝えようとしたが、肩を動かすことすら思うにまかせず、あっちへ行けと追いはらうような、おかしな手つきになってしまった。
運転手はドアを閉じ、走り去った。気分を害しただろうか。きっとそうにちがいない。敏夫は後悔した。こういうささいなことが気になるたちだった。
気のいい運転手だった。病院の出口でもこちらの合図に気がついてくれ、私が乗りやすい位置までわざわざタクシーを移動してくれた。道中も、静かな運転に徹してくれた。
親切を、仇で返してしまった。せめて代金の釣り受け取らなければよかったのだが、株屋だった祖父ゆずりのこの癖は、いまは妻によって封印されている。
入院当初、妻は毎日、見舞いにきてくれた。仕事の忙しい日は、面会時間をすぎてからこっそり病室に忍んでくることもあった。枕元で、妻は泣いてばかりいた。交通事故に遭い、全身を包帯でぐるぐるに巻かれた夫の姿に、涙がとまらないようだった。そのたびに敏夫は、詫びを繰り返した。
思いかえせば十年にわたる結婚生活、敏夫は妻に詫びてばかりいた。理由はいつも金のことだった。
敏夫は莫大な借金を抱えていた。友人の連帯保証人になったことがきっかけだった。友人は南青山にレストランを開くのだと言っていた。建設中のビルに敏夫を案内し、ここの最上階で最高級のフレンチをふるまうのだと、興奮ぎみに夢を語ってくれた。しかし完成したビルの最上階には、老舗すし店の支店が営業していた。友人は連絡を絶った。
周囲は敏夫がはじめから騙されていたのだと嗤った。激怒した義兄も同意見だったが、妻は敏夫をかばってくれた。敏夫は住まいを失った。義兄は自分が海外赴任するあいだ留守になる家に、敏夫たちを住まわせてくれた。しかし、借金の残りまでは肩代わりしてくれなかった。
敏夫は仕事を変えた。しかし、どの職場も長続きしなかった。妻は生活のため、パートを掛け持ちしなければならなかった。早朝のビル清掃と、駅ビルのパン屋の店員だった。彼女はいつも疲れ切っていた。敏夫の目にも、日に日にやつれていくのがわかった。あれほどチャーミングだった笑顔も、めったに見せることがなくなった。
結婚は、彼女の方から申し込まれた。誰にでもやさしいところが好きだと、新婚の頃はそう言ってくれた。しかし三年もたつとその評価は、「底抜けのお人好し」にかわった。愛情やユーモアのこもった言い方ではなく、絶望といらだちを吐き出すような、苦々しい

言い方だった。

そんなところへ起こったのが、今回の事故である。横断歩道で信号無視の車にはねられた。一〇〇パーセント、相手の責任による事故だった。しかし保険金がおりるまで、入院費と手術費はこちらが持たねばならなかった。事故の相手が負担することを申出てくれたが、敏夫は辞退した。彼女は、三人の小学生をかかえるシングルマザーだった。妻はそのことを嘆き、以来、あまり見舞いにも現われなくなった。

入院はひと月におよんだ。医師からは早すぎると言って退院をとめられたが、もう金がなかった。それに、敏夫は妻の顔が見たかった。一刻も早く、妻のよろこぶ顔が。

敏夫の胸にはひとつの吉報が秘められていた。これを聞けば、妻の長きにわたる憂悶もいっきに雲散霧消することだろう。そしてまた、あの無邪気な笑顔を見せてくれるにちがいない。

アルミの門扉を開き、杖にすがりながら段をのぼった。懸命の努力で玄関にたどりついたあと、ポケットから鍵を取り出すのがまた、至難の業だった。肩が動かないうえ、つねに前屈みの状態で、腰がのびない。ようやく鍵をとりだしたが、首が固定されているので、視線も足下から上に上がらない。敏夫は頭上にある鍵穴を手探りでさがした。

――？

鍵は開いていた。うっかり小首を傾げようとすると、また背中に激痛が走った。こんなささいな動作までできなくなってしまったのだ。

鍵がかかっていないということは、妻は家にいるということだ。仕事を休んだのだろうか。それならなぜ、病院に迎えに来てくれなかったのだろう。今日退院することは、留守番電話に入れておいたのに。

玄関で靴を脱ぎ、框をあがった。スリッパをはき、足をひきずって廊下をリビングにむかった。自分のつま先を見ながら、壁に手をつき、一歩一歩すすんだ。体の自由はきかなくても、心は軽かった。

人間万事塞翁が馬という。不幸な出来事が、思わぬ幸運をもたらしてくれた。事故の知らせを聞きつけて、あの友人が駆けつけてくれたのである。

友人はレストランの一件を泣いてわびた。事情も説明してくれた。彼自身、別の知人の連帯保証人になっていた関係で悪徳金融業者につけねらわれ、敏夫にまで被害がおよぶことを恐れて雲隠れしたのだという。

敏夫は友人の手をとり、和解した。いや、もともと彼を恨む気持ちなどなかったのだ。きっと何かふかい事情があるにちがいないと信じていた。

敏夫は胸の晴れる思いだった。やはりそうだったかと、義兄を見返してやりたい気持ちだった。自分は騙されてなどいなかったのだ。

友人は敏夫の現状に、おおいに同情してくれた。とくに金銭的な苦境に関しては自分にも責任があると言ってくれた。そして、ある解決策を提示してくれたのである。

長崎県五島列島にあるちいさな島で、サクラ海老の養殖事業をはじめる企業があり、いま資金を募っている。信頼できる既成の技術で、売り先もすでに確保できているという。失敗しようのない投資話で、異常気象でも起きない限り、半年で出資額の三倍は固い。計画は極秘で進行しているのだが、君には特別に、僕の投資枠を半分わけてあげてもいい。

よさそうな話だがそんな金はもっていないと答えると、彼は抜群の示唆を敏夫にあたえ

てた。

今回の事故の、保険金があるではないか。

保険はすぐにはおりないだろうが、それを担保にすれば、よそから金を借りることができる。投資は目標額に達すれば締めきられてしまうので、急ぐ必要がある。

友人は、金融会社の知り合いを敏夫の病室まで呼びつけ、手際よく話をまとめてくれた。敏夫は感激した。友人は、敏夫の夫婦仲のことまで案じてくれた。この話を聞けば、奥さんもさぞかし喜ぶであろう。君への尊敬ももどる。また新婚時代のように、幸せな生活を送ることができる……。

ようやくリビングにたどりついた。敏夫は下をむいたまま。妻の名を呼んだ。その声はうつろに反響した。義兄の家はモダンなつくりで、リビングは吹き抜けになっていた。妻の返事はなかった。

敏夫はソファに腰をおろした。ガラス製のローテーブルに、一通の茶封筒が置いてあった。封は切られていた。印刷されている社名は、敏夫が新しく融資をうけたばかりの、あの金融会社の名前だった。

すると妻は、もう投資のことを知っているのだろうか。

敏夫はもういちど妻の名を呼んだ。やはり返事はなかった。あたりを見回そうにも、視界はかぎられている。敏夫は上目づかいの視線を床のうえに走らせ、妻の姿をさがした。

やはり、妻はいないようだった。かわりに、おかしなものを見つけた。なぜリビングのまんなかに脚立が倒れているのだろう。そりまわりに、どうして妻のスリッパが散乱しているのだろう。

かたづけようと思ったが、いちど座りこんでしまうと、もう立ちあがることは困難だった。

きっと買い物にでも行っているのだろう。敏夫はこのまま妻の帰りを待つことにした。彼女のあの、子供のような笑顔を思い浮かべながら。